

傍聴記

「公開研究会『アレクシエーヴィチとの対話』刊行に寄せて」

安島里奈

2021年6月、『アレクシエーヴィチとの対話——「小さき人々の声を求めて」』が岩波書店より出版された。この出版を機に、ベラルーシの作家スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ氏を招いた「公開研究会『アレクシエーヴィチとの対話』刊行に寄せて」がオンライン上で7月27日に開催された。

ウクライナ、ベラルーシ、ロシアの三つの文化をバックグラウンドに持つアレクシエーヴィチ氏は、ベラルーシの作家アレシ・アダモーヴィチを師と仰ぎ、証言文学という手法で作品を世に送り出し続けている。彼女の名が一躍世界に知れ渡ったのは、ノーベル文学賞を受賞した2015年のことである。その翌年2016年11月には来日し、福島県を訪れ、原発事故による汚染地域に赴き被災者の声に耳を傾けた。その後、東京外国語大学にて名誉博士号が授与され、記念スピーチおよび学生との対話¹が行われた。代表作は「ユートピアの声」5部作——『戦争は女の顔をしていない』、『ボタン穴から見た戦争（原題：最後の証人たち）』、『アフガン帰還兵の証言（原題：亜鉛の少年たち）』、『死に魅入られた人びと』、『チェルノブイリの祈り』、『セカンドハンドの時代』——である。

現在、アレクシエーヴィチ氏を取り巻く環境は非常に厳しいものとなっている。ベラルーシでは、2020年8月に行われた大統領選における不正をめぐってルカシェンコ大統領の退陣を要求する大規模な抗議デモが起き、それを武力制圧しようとする政権との戦いが今なお続いている。彼女もまた、ベラルーシに留まることができず、ドイツに「亡命」した。ドイツにいるとはいえ、決して安全だというわけではない。本研究会が開催された今年7月だけでも、次のような「事件」があった。アレクシエーヴィチ氏が会長を務めるベラルーシ・ペンを解体するようにベラルーシ法務省が最高裁に訴え、ベラルーシ・ペンの銀行口座が凍結された。また、「アレクシエーヴィチとトカルチュク²のプロテスト」というイベントに参加するため、ポーランドのヴロツラフに飛行機で行こうとしたアレクシエーヴィチ氏が「爆弾を持っている」という理由でベルリンの空港で足止めを食らった。なお、飛行機には乗り損ねたが、イベント主催者側で手配した車でポーランドに行き、イベントは無事行われたという。このようなきな臭い状況の中、アレクシエーヴィチ氏の声はベルリ

1 いずれも YouTube にて公開されており、TufsChannel から視聴できる。

記念スピーチ：<https://www.youtube.com/watch?v=ntYA1Ga3llc>

学生との対話：https://www.youtube.com/watch?v=m9_feBB6MYM（最終アクセス：2021年8月2日）

2 オルガ・トカルチュク。ポーランドの作家。代表作に『昼の家、夜の家』、『逃亡派』などがある。2018年ノーベル文学賞受賞。



ンからリアルタイムで我々の元に届いたのである。

研究会は2部構成である。第1部「『対話』その後」は著者の一人である沼野恭子先生がアレクシエーヴィチ氏にインタビューをする、という形式で進められた。インタビューでは、まず、ベラルーシの情勢に関する質問が投げかけられた。アレクシエーヴィチ氏は、去年の夏の大統領選挙後、ベラルーシでは「革命」が起きたという。26年間独裁者が国を支配しており、恐怖やソビエト時代の習慣から沈黙は長い間続いていたが、今や新しい世代の人たちが生まれ、その人たちも含めベラルーシの人々は世界中を旅するようになり、新しいテクノロジーが生まれ、それを人々が使いこなすようになった。人々は、自分はここにいるのだと主張し始めたのだと述べた。同氏は当時住んでいた8階の部屋の窓から見た光景——何十万人もの人々が参加していた行進、白赤白の歴史的なベラルーシの旗（長い間禁止されていた）を掲げた人々が祝祭的雰囲気をもっていたこと——を回想した。これを見て自国の人々を再び愛するように、信じるようになったといい、国民が誕生したと実感したそうだ。平和的に革命に参加した人々に対して、武器を手にするべきであったという批判があがったが、「血で顔を洗う」事態になることを防げた故、平和的革命の方針は正しかった、と評価した。女性たち、身体障害者たち、年老いた人たちまでもが皆、このデモに加わり、3-4ヶ月にわたって抵抗を続け、ベラルーシの各地でこうした平和的デモが繰り広げられていた。だが、ルカシェンコ側はロシアの支援を得てこうした運動を弾圧しようとする。数十万人もの人々が国外へ脱出し、国内では相当数の人々が逮捕され、新聞は数十単位で廃刊に追い込まれ、市民社会団体がいくつも廃止・閉鎖された。こうしたベラルーシの現状を、「人道的、あるいは人道主義的な大惨事」と表現する。

次に、現在、世界では、香港やミャンマーなどでベラルーシと同様、民主化の動きとそれに対する弾圧が起きているが、このような世界の情勢についてどう考えているか？ という質問がなされた。アレクシエーヴィチ氏は、全世界では公正を求める感覚、変化を求める感覚が人々の間で高まっており、全世界で民主化を求めた戦いが起きているのが今の状況であるが、その一方で、社会は右傾化している（例えば、ハンガリー、ポーランドなど）と述べる。

また、彼女自身も身に危険を感じている。ルカシェンコ自身の計画・プログラムがあり、これはベラルーシ国内だけではなく、国外に出て戦い続けている人も弾圧の対象にするというものだという。現在、革命についての本を執筆中であり、その内容は革命がどのように始まったか、革命の参加者たちが未来、過去（去年の夏）についてどう思っているかというものと話す。ルカ



インタビューに答えるアレクシエーヴィチ氏

シェンコがあらゆる証人、証言者、また今までの数々の罪の痕跡を抹消しようとしている、というルカシェンコ・プログラムの背景を述べ、アレクシエーヴィチ氏はこうした事態に

なることに心の準備をしておくべきであるし、心の準備ができていると語る。空港で足止めを食らった例の件は、当局から監視されているサインだという。革命についての新しい本がどのようなものか訊ねられると、参加者や投獄者、弾圧された人達の証言（一部は本人たちから送られてきた）を集めたものだと答え、この本にはアレクシエーヴィチ氏自身の考えも書かれるという。新しい本を書くのは非常に大変だが、犯罪者がしたことの痕跡を消し去ってしまわないよう、本当に起こったことを歴史に残すために書くのだと述べた。

アレクシエーヴィチ氏はベルリンにて、EU や国連などの国際機関にベラルーシの対話的政権移譲の正当性を発信しているが、今年に入ってから、どのような具体的な「活動」やメッセージをどのような機会を設けて発せられているのか？ という問いに対して、同氏を含めた調整評議会の幹部、ベラルーシのエリートたちは国内外に向けて我々の勝利を信じようと働きかけていると答える。アレクシエーヴィチ氏はドイツの大統領に面会する、国連や欧州議会でスピーチを行う、といった活動をしており、「ヨーロッパの心臓」と呼ばれるベラルーシにおいて独裁が許されてはならないと、全世界の安全が脅かされていると語った。

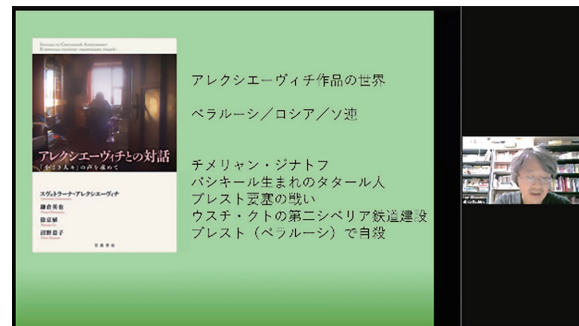
次の質問は、あるインタビューで「証言者が2度目に話すほうが上手に話すことに気づいた」と言っていたが、一般論として、どう話していいのかもわからない辛い体験を初めて話す混乱した発言の中にも貴重な何かがあるのではないかと、というものだった。同氏は、戦争に関する証言集を書こうとする際のことを例に挙げ、兵士が戦争から帰還した直後では、その人の目には全てが血まみれに見えるが、しばらく時間が経つと戦争の全ての印象は薔薇色に変わってしまうことがあると言い、今、ロシアでは戦争の「薔薇色化」が起きていると指摘する。5月9日の対独戦勝記念日では第二次世界大戦中に国民が体験した凄惨な血まみれの状況が、薔薇色の美しい記憶にすり替えられてしまっているのだという。したがって、出来事があった直後の印象・証言も大切だが、それと同時に非常に重要であるのは、その後長い時を経て再びその証言者が当時の記憶を思い起こしてするもう一つの証言であり、自身の作品において、体験直後に語られる生々しい記憶を基に語られる証言と、長い時を経てもう一度深く考え直した後の新たな証言の二つのバランスを取るよう心がけていると話した。これは人間という複雑な存在の持つ多面性、様々な面を表すためのアプローチなのだそうだ。

この質問に関連して、集めた証言はどのように配置しているのか？ まったく異なる証言を並べると、証言どうしに対話が生まれ、一種の「モンタージュ」のような効果が生まれるのではないかと、その並べ方はどのように決めているのか？ という問いが投げかけられた。アレクシエーヴィチ氏は自身のスタイル・ジャンルを人々の沢山の声から成る長編小説の新しいフォームだと思っているという。作者の想像で作上げたものではなく、人々の声を編むことで長編小説を作ることが自身の作法だと話した。この長編小説のプロットは人々のいくつもの声からできており、次に語る人は自分の前に語った人の続きであることもあれば、全く違う話題を始めることもあり、自分の前に掲載されている証言に反論するような論争するような証言もある。同氏にとって重要なのは、人が自分の身に起きたこと、自分の感情を語ることであり、それによって時が生まれ、そして人そのものが生まれ、その時代の人が生まれると思うと語った。

第1部の終わりには、本オンライン研究会に参加した日本ペンクラブ会長桐野夏生³氏からアレクシエーヴィチ氏に、ベラルーシの非常に悪夢的な状況に同じ作家として恐怖しか感じず、ペンクラブで連帯と支援の声明を出したが、ベラルーシについて情報収集をし、これからもずっと支援をしていくと、このことは普遍的なことであるので皆で力を合わせて切り抜きたいというメッセージが届けられた。日本ペンクラブは、2021年7月12日にアレクシエーヴィチ氏およびベラルーシ・ペンに宛てたメッセージ⁴を公開している。桐野氏のメッセージおよび日本ペンクラブからの声明についてアレクシエーヴィチ氏は感謝を表し、今のこの恐ろしい時には支援が本当に大切だと強調した。日本ペンクラブのメッセージは電報で届いていたが、すぐに感謝の返事ができなかったと話した。それは、その当時色々な人が逮捕されており、ベラルーシ・ペンに勤めていた人や関係者、作家を国外(ウクライナ、ポーランド、リトアニアなど)に送り出すことに奔走していたからだという。考えを同じくする人たちがいるというのを見て取るのがいかに心の支えになるのか、いかに大切であるのか、そして支援しているという言葉が耳にすることがいかに大切かということを実感していると述べた。世界の作家たちは一つの拳となって絶対に反撃をしなければならないと思うと力強く言い、民主主義をなくそうとする人間たちに、第二次世界大戦後に地道に築き上げてきたものを壊そう、乗っ取ろうとする人達に、一つの拳となって強烈なパンチを浴びさせるべきだと断言した。

第2部では、4人のパネリストが順番にそれぞれ話し、最後に岩波書店の編集者である奈倉龍祐氏が話す、という構成で進められた。

1番目に越野剛先生(慶應義塾大学准教授)が、ロシア語とベラルーシ語の関係から最近のベラルーシ文学の状況とその変化を報告する。ベラルーシの日常生活では、圧倒的にロシア語の使用が優勢を占め、ベラルーシ語は使用の場面が限られるが、文学においては状況が異なり、ベラルーシの作家であればベラルーシ語で書くべきだという意識は強く残っているという。しかし、ベラルーシ語の読者は多くないため、商業的に作家活動をするのは困難な状況にあるようだ。ベラルーシで10年ごとに行われる国勢調査から最近の言語状況を概観し、ベラルーシ語の使用状況は厳しいという。しかし、首都ミンスクに限りベラルーシ語使用の増加傾向が見られるのは、両言語の話者が一定数おり、その人達の意識の変化によるものではないかとみている。これらの新しいベラルーシ語話者はルカシェンコ



越野剛先生

3 作家。『柔らかな頬』で第121回直木賞受賞。2015年紫綬褒章受章。日本ペンクラブ史上初の女性会長。2020年にディストピア小説『日没』を刊行。

4 「ベラルーシの友人の皆様への連帯のメッセージ」<http://japanpen.or.jp/statementberalus20210712/> (最終アクセス: 2021年8月2日)。

体制に反対する勢力の核となっている一方、ベラルーシ語話者が多い農村部の人々は逆にルカシェンコの重要な支持基盤の一つであった。新しいベラルーシ語話者は状況に応じてベラルーシ語とロシア語を切り替えて使っており、反ルカシェンコを掲げる人たちはより広く届く言語ということでロシア語を使用しているという。報告の最後に、90年代から00年代にかけて活躍したアダム・フロース、2010年代以降に人気作家となったヴィクトル・マルツィノーヴィチという現代ベラルーシの二人の作家を比較する。両者ともロシア語とベラルーシ語で書く作家だが、その使い分けの仕方が大きく異なる。フロースが「純文学」をベラルーシ語で、大衆文学をロシア語でというように目的によって書き分けたのに対し、マルツィノーヴィチはそのような区別をせず二つの言語で交互に作品を発表しており、彼の言語感覚は新しいベラルーシ語話者に近いという。最近の国勢調査の結果やマルツィノーヴィチのような作家の出現を受け、ロシア語とベラルーシ語は対立関係（支配的対被支配的）にあるのではなく、自由に入れ替え可能で補い合えるような新しい関係を作り出しているといい、ロシア語作家であるアレクシエーヴィチがノーベル文学賞を受賞し、ベラルーシを代表する作家としてペンクラブの会長になった意義も大きいとみなす。ベラルーシにおいて、ベラルーシの独自文化としてベラルーシ語を話す一方で、ロシア人だけのものではないロシア語を積極的に豊かにしていく可能性が、ベラルーシの未来に見えると結んだ。

2番目に鎌倉英也氏（NHK エクゼクティブ・ディレクター）がアレクシエーヴィチ氏と福島



鎌倉英也氏

島県に同行した際のことを中心に話し、1999年以來の知己である鎌倉氏ならではの視点でアレクシエーヴィチ氏の人との向き合い方を伝えた。アレクシエーヴィチ氏は福島県で抵抗する人々を「取り残された人々」として見ており、社会が点と点が線で結ばれ、面に広がるような連帯ができていないのではないか、ということを見抜いたという。また、相手

の正面に向き合うのではなく、斜めや横に座って話を聞くという、アレクシエーヴィチ氏の取材姿勢についても話された。この取材の姿勢は一貫して変わっていないようだ。加えて、質問をした相手が声を詰まらせ、泣き出してしまった際に、アレクシエーヴィチ氏が「そんな質問をした私が悪かった、申し訳なかった」と謝る姿を見て、証言を集めるという手段のために人に会っているわけではないと非常によく分かったとその誠実な人柄を物語った。さらに、福島の取材の後に東京外国語大学で学生たちと対話をした際、ベラルーシにおいても日本においても抵抗の文化がない、と言ったことはアレクシエーヴィチ氏が福島で見聞したことの実感として語られたものだといい、その原因をベラルーシにおいては全体主義的な歴史と非常に深い関係があると鎌倉氏は考えている。一方、日本の場合は文化や精神性の問題なのではないかとアレクシエーヴィチ氏は見ているのだが、これについて抵抗の文化について我々は考えていかなければならないという。鎌倉氏は、全体主義という言葉が非常に大きな意味を持っているといい、アレクシエーヴィチ氏のいう共産主

義を、全体主義に傾いていく非常に大きな要因がそれにあるものとして解釈する。共産主義を支えている生き方の問題と国家の問題は区分けして考えるべきだとし、全体主義の歴史に覆われてきたベラルーシの人々が26年間の沈黙を破り立ちあがっている現実を前にした時、抵抗の文化とは何かというアレクシエーヴィチ氏の問いが問われていると述べた。アレクシエーヴィチ氏は日本に抵抗の文化がないのは日本の文化や精神性に結びついているのかもしれないといったが、それを日本に住んでいる人間が甘受していいのかと思っ
ているともいう。また、日本においても全体主義化が進行していると指摘する。日本の中で「戦争の薔薇色化」が広まっているといい、またこの「薔薇色化」についても考えねばならないとしたうえで、ミンスクでの出来事は国家というものに住んでいる人間として絶えず問われなければいけない問題だと語った。

3番目のパネリストである徐京植氏（作家）は、アレクシエーヴィチ氏の「一つの拳と
なって反撃すべき」という言葉にいつもと違う
印象を受け、強い決意を感じたという。徐氏は
日本ペンクラブの声明を受け、現実がディスト
ピア小説を追い越しており、現実をどう描くの
かという問題は文学に携わる者には大変困難で
あるが避けて通れない戦いだと述べる。続けて、
声明の結びの言葉「深い文学的共感で結ばれた
友情とともに」を引き、今日のカオス的狀況に
おいてこの「文学的共感」とは、社会科学的・
政治的公式に当てはまる見取り図が描けなくて

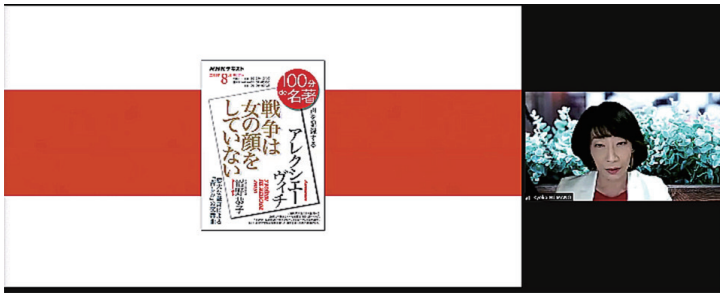


徐京植氏

も、人間に対して人間が行う共感を表現するものであると読み、文学をその最後の抛り所として捉える。また、詩人齋藤貢氏（震災当時、福島県で高校の校長であった）の詩のフレーズ「虚飾の舌で／優しく、希望を歌うな。偽りの声で、声高に、愛を叫ぶな」を引用し、虚言のまかり通る日本の現状と日本政府を舌鋒鋭く批判する。ここで具体的に挙げられていたのは、復興オリンピックをうたい被災地を利用・搾取したこと、オリンピックが商業主義と国家主義の祭典という本質を露わにしたこと、原発汚染水の海洋放出に反対する周辺諸国に反日というナショナリスティックなレッテルを貼ること、言葉への信頼が失われ、対話や理論が成り立たないことであった。徐氏はこの現状を「ディストピアの出現」と言い表した。ベラルーシ、香港、ミャンマーなどで起きている出来事に関して、抵抗できない間は、世界はもう一度暴力の時代へと引き戻されるのではないか、という危機感を強く示した。こうした国々での出来事が世界全体へと容易に波及するであろうと示唆し、これを防ぐのは第二次世界大戦の経験、特にナチズムの経験に対する反省であるという。しかし、この記憶が薄れ歪曲化されていると指摘する。健全とされる市民社会が非難する価値観に対して魅力や興味を感じてそれを標榜する人が多いと思うと語り、血と涙の中で甚大な犠牲のもとに打ち立てた戦後の民主主義が虚構化しているという。また、現代のコロナ禍についても触れ、アメリカのホロコースト研究者ティモシー・スナイダーの著書より「連帯失くして自由はない」という言葉を引用し、現在進んでいる分断は我々から根本的に自

由を奪い取る装置であるという。権力は分断が自由を我々から奪うことをよく知っており、戦争史研究と現在のコロナ禍を関連付けることに感銘を受けたと述べる。我々は「夢の挫折」の余韻の中に生きており、それは程度を強めていると、今日の現実を憂い、警鐘を鳴らす。特に『セカンドハンドの時代』に描かれる「ユートピア」の後の時代を生きるものとして果たすべき役割をその状況において持ちうるべきコミュニケーション・言葉を探し出していかなければならないと強く思うと締めくくった。

4番目は本学教授の沼野恭子先生であったが、時間の都合上、ごく短い講演となった。沼野先生は文学と歴史学のはざまをテーマに、イヴァン・ジャブロンカ『歴史は現代文学である』を挙げ、歴史学にフィクションを取り入れてもいいのではないかという彼の提言を紹介する。文学と歴史学、ジャーナリズム、あるいはノンフィクションの境界領域を



沼野恭子先生

どう考えればよいかということに関心を向け、石牟礼道子やエリザベス・ブルゴスを例示し、証言文学というジャンルが成立していることを示した。一言でノンフィクション文学と言っても様々な形態がある、ということをお話すつもりであったそうだが、残念ながら時間の都合で割愛された。沼野先生は

アレクシエーヴィチ氏の文学性を次のように見出す。一つは、様々な形で質問をして取る証言であるといい、証言者自身が言語化する行為が非常に創造的で文学性があるとしている。加えて、そうした証言をアレクシエーヴィチ氏自身が「声のロマン」と呼び、自身を作曲家に例えているように、声を一つの音として「作曲」をしていくことに大きな文学性があると話した。

最後に、奈倉龍祐氏が、アレクシエーヴィチ氏が非暴力的な抵抗運動を「革命」と呼んだことに触れ、現地で行われている抵抗運動の例をいくつか挙げる。そうした抵抗運動に参加する人々の粘り強さやウィットに富んだ平和を愛する抵抗運動を見て、ベラルーシに信頼できる誠実な人々がいるということを感じ、そのことに人間に対する信頼を改めて思うと語った。また、それと同時に、抵抗運動に参加する人々が今この時も牢獄に入れられていると思うと心が痛むと話された。これに関連して、他社である集英社から刊行されたサーシャ・フィリペンコ『理不尽ゲーム』を紹介した。奈倉氏は本を買うよう宣伝したのではなく、本を通してこの現実を知って欲しいというメッセージを編集者の目線から伝えられた。

予定時間を大幅にオーバーした研究会であったが、その内容は実にアクチュアルで、かつ普遍的なテーマを突きつけたものであった。大きな一つの拳を突き上げて進む先は、未来でなければならぬと、誰もが思ったに違いない。

公開研究会『アレクシエーヴィチとの対話』刊行に寄せて

日時：2021年7月27日（火）

場所：Zoom ウェビナーでのオンライン開催

第1部 「対話」その後

スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ（作家）

北川和美（ロシア語通訳）

吉岡ゆき（ロシア語通訳）

桐野夏生（日本ペンクラブ会長、作家）

第2部 「小さき人々」の声を求めて

鎌倉英也（NHK エグゼクティブ・ディレクター）

徐京植（作家）

沼野恭子（東京外国語大学教授）

越野剛（慶應義塾大学准教授）

奈倉龍祐（岩波書店編集者）

主催：科研(B) 18H00656 「ロシア・ウクライナ・ベラルーシの交錯——東スラヴ文化圏の領域横断的研究」（代表：沼野恭子）

共催：東京外国語大学 総合文化研究所

協力：岩波書店

後援：日本ペンクラブ

科研費
KAKENHI

Беседа со Светланой Алексиевич

2021年 7月27日 (火)
18:00~19:50

【オンライン 科研 研究会】

Zoom ウェビナー(要事前登録)
一般公開(500名まで)
参加費無料



『アレクシエーヴィチとの対話』 (岩波書店、2021年) 刊行に寄せて

- 【第1部】 18:00-18:45 「対話」その後 (露日通訳付き)
スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ (作家)
- 【第2部】 18:50-19:50 「小さき人々」の声を求めて (日本語のみ)
鎌倉英也 (NHKエグゼクティブ・ディレクター)
徐京植 (作家)
沼野恭子 (東京外国語大学教授)
越野剛 (慶應義塾大学准教授)
奈倉龍祐 (岩波書店編集者)



ノーベル文学賞を受賞したベラルーシのロシア語作家スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチの創作の道徳と極意を、NHK同行取材記録や講演・対談・評論によって描いた『アレクシエーヴィチとの対話——「小さき人々」の声を求めて』の刊行に合わせ、科研「ロシア・ウクライナ・ベラルーシの交錯——東スラヴ文化圏の領域横断的研究」でオンライン研究会を行います。最近のベラルーシ情勢も含め、アレクシエーヴィチの作品が提起してきた問題について考えます。

- ・主催：科研(B) 18H00656 「ロシア・ウクライナ・ベラルーシの交錯」
- ・共催：東京外国語大学 総合文化研究所
- ・協力：岩波書店 ・後援：日本ペンクラブ
- ・参加ご希望の方は、7月26 (月) 17:00 (日本時間) までに右の二次元バーコードを読み取り、参加登録フォームより事前登録をお願いいたします。
- ・大学ホームページからも登録できます。

https://us02web.zoom.us/webinar/register/WN_PEzcmoh-TI2_qRYByLXuPA

- ・問い合わせ先：nukyoko@tufs.ac.jp (沼野恭子)

